

調査団員報告書

調査国：ドミニカ共和国

期間：2024年9月8日から2024年9月19日まで（移動日含む）

報告者：孝藤 右近（Cool Japan Entertainment）

担当分野：舞踊と開発

1. はじめに

この度は私自身初となりますドミニカ共和国での活動機会に恵まれましたこと、JICAドミニカ共和国事務所の坂口所長をはじめ皆様に御礼申し上げます。

またドミニカ共和国の各地で迎え入れてくださいました関係者各位に重ねて御礼申し上げます。

2. 背景と調査課題

報告者は、2018年に立ち上がった「Bon for Africa～アフリカ盆踊り～」実行委員会の委員長としてJICAとの協働を開始し、2019年8月に行われたTICAD VIIにおいて、本会議の前夜祭として横浜にて数千人を集める華々しいイベントを開催。この時作った動画も再生数73万回というJICAがかかわった動画の中でも最大規模のPVを記録した。その後COVID19パンデミックの最中に駐日ジャマイカ大使館からの依頼を受け、ジャマイカ建国60周年に向けた記念コンテンツとして、JICAと共にオリジナル楽曲と振付によるReggae Bon Bon、JJ Partnershipを完成（2022年）させたのを皮切りに、日墨研修事業50回記念楽曲Mexico Bon Bon（2023年）を制作。その後2023年に開始されたJICA新規事業「Artist in Project」のサブプロジェクトとして「世界Bon Bon」が位置付けられ、日ドミニカ共和国外交90周年記念楽曲Palo Bon Bon（2023年）、日ニカラグア国際協力60周年記念楽曲Nica Bon Bon（2024年）を制作、発表してきた。また、日アイルランド商工会議所からの依頼を受けて制作したアイルランド盆踊りがX（旧Twitter）でトレンド入りし、800万PVを記録するなど、大きなインパクトを生む活動に成長してきている。また自身が講師をつとめる東京大学の盆踊りの授業においても、世界Bon Bonの楽曲を使い授業を行っているが、若い世代にも大変好評である。

今回の調査においては、「舞踊と開発」をテーマに、前述の「世界Bon Bon」の活動を行うのみならず、国際協力の中に如何に舞踊の持つ力を活用できるのか、という点を考察することとした。以下、今次調査成果を記載するとともに、今後に向けた展望・提言を行う。

3. 調査概要

9月9日（月） JICA事務所打ち合わせ、ASONAJA嶽釜会長面談

9月10日（火） グアナニコ出張

9月11日（水） 国立劇場打合せ、TV取材、文化省民族学研究所訪問、コトウイ移動、El Jameoとの意見交換、練習

9月12日（木） サンチェスラミレス県エコツーリズム審議会訪問、コトウイ芸術会館での講演、東シバオ工科大学（UTECO）での講義

9月13日（金） 講演準備、国立劇場講演

9月14日（土） 移住記念碑訪問、ドミニカ盆踊り大会出演

9月15日（日） 撮影、Artist in Project意見交換

9月16日（月） 林監督、栗山脚本家報告会への参加、嶽釜会長面談、サントドミンゴ自治大学（UASD）芸術学部での講義

9月17日（火） JICA事務所報告（英語でのプレゼン含む）

4. 調査結果・成果

ドミニカ共和国における音楽と舞踊の浸透

ドミニカ共和国では街中に音楽が溢れており、音楽を聴くと自然と踊り出す人々の姿を幾度となく観察した。国際的に認知度の高いメレンゲやバチャータや、アフリカのリズムと融合した民族音楽であるパロ、中南米の若者の間で人気が高まっているデンボーなどを生み出してきた国であり、音楽が単体としてではなく、踊りも同時に合わせて開発させており、当国の文化に融合しており、生活の一部となっているのみならず、各種式典や学校行事などにおいても全くの違和感なく音楽と舞踊が使われている。この点は「舞踊と開発」を考察する上で、アドバンテージのある文化習慣・土壌があると認識した。

➤ 地方出張（グアナニコ、コトウイ）

メレンゲティピコの聖地とされ、JICAの持続可能なコミュニティ観光に関する技術協力プロジェクトで協力を行ったグアナニコ市へ訪問。同市の観光農園であるHacienda Cufaにおいて、Merengue Bon Bonの制作に係る各種準備・意見交換を行った。同市はカカオとメレンゲティピコを市の観光財として活用し、観光客の呼び込みを進めている。一方でカカオ農園は他の地域の観光農園ほどは設備が整っておらず、また市に宿泊施設がないことがボトルネックとなり、大きな観光収入を得るには至っていない。一方でカカオの商品開発などは進めており、温かく面倒見の良いスタッフがいること、そしてメレンゲティピコには多くのファンがいることから、この農園を知ってもらう活動を様々な形で進めることが肝要かと認識。

オーガニックのカカオから産まれるチョコレートなど現在日本でも健康と食という点ではかなり貴重な生産であるという点を生かし、収穫祭でのお祭りをつくりメレンゲティピコ、盆踊りを作っていくことで持続可能な観光へと繋がるのではと感じた。

コトウイでは、訪れた当日夜に同市で200年以上音楽を継承する一族及びそのバンド（El Jameo）との間でセッションを行い、Cotui Bon Bonの制作に向けた意見交換、調整を行った。大人から子供まで巻き込む熱のこもった充実した演舞セッションとなり、音楽と舞踊の人々を巻き込む力を実感した。炭坑の仕事から一人ずつ帰還し音楽の輪に加わっていく日本における民謡の発展した様と似た懐かしさを感じた。海辺で太鼓を持ち合わせエイサーを歌い叩き踊る姿、三味線と唄い手が家の軒先に集まりおわら節を奏でる姿、今もなおその情緒が見かけることが出来き観光資源として文化が必要とされている事からコトウイでも観光客参加型の練習会などあの素晴らしい源流の雰囲気味わえることが財産であると感じた。持続可能性（サステナビリティ）については歌踊り音楽に関してはそもそも日本を含め世界でどのような苦難があっても人は様々な形で継承してきたことが今回のメレンゲ、パロの源流をみても汲み取れ、まさに持続可能をテーマにする開発に対して持続の根底であり人が生きる上で必要なコミュニティ形成であると強く感じた。

その後、芸術劇場での講演（El Jameoとのコラボレーション）、東シバオ工科大学での講義を行った。大学でスライドを使った講義は人生初となったが、学生及び教授・講師陣が積極的に参加したことから、大成功・大盛況といえる内容となった。学生に関して言えば現在講義している東京大学の生徒も含め文化、歴史を垣間見れる価値のある踊りというものに興味があるだけでなく一緒に踊って参加するという点が、当時の歴史にタイ

ムワープする感覚も引き出され講義の盛り上がり、文化への興味の入口、継承としての役割があると講義の重要性を感じた。

一方でEl Jameoについては如何に活動していくのか、という点に課題があると聞いており、本報告の提言において課題解決のためのアイデアを記述する。両市の訪問を通じて、ドミニカ共和国の農村部・地方部を知り、そこに住む人々の生活に音楽・舞踊が溶け込んでいることを肌をもって実感できたことは大きな収穫といえる。

➤ 国立劇場

9月13日にサントドミンゴの国立劇場にて公演を行った。日本舞踊、剣舞、歌舞伎-獅子踊り、世界Bon Bonの演目に参加した。（当日はそのほか、Laura Mella所員によるJICA及びArtist in Projectの事業紹介、映画監督林弘樹氏、脚本家栗山宗大氏によるコミュニティ映画の可能性についての講演があった。）招待客のみ、ほぼ満場の劇場にて、いずれの演目も喝采を受けた。日本との長年の関係のある聴衆からは、ドミニカ共和国でこのような本物の日本文化に触れる機会はなかった、という声を聴いた。世界Bon Bonについては会場の制約で、皆で踊る形ではなく、音楽と舞踊を見ていただくショースタイルとなったが6曲すべてに熱烈な反応があり、それぞれの振付におけるテーマ性の違いも含めて共感を得ることができたと認識している。国立劇場のような国の最も格の高い劇場で公演をすることはインパクトが大きく、今後の世界展開の中でもこのような機会を探っていきたい。

また私個人としては開発でドミニカ共和国に来ていらっしゃるJICA職員、ドミニカ共和国の皆様と一緒に演奏、踊りを共にできたことが一番の収穫であった。文化イベントは各地で爆発力がある一方、単発であることから継続が難しいことがありまさに持続可能が問題化される。今回は現地スタッフを含むJICAスタッフやJICAボランティアの中で広まったことがまずは私が最も重要視した点であり、このようなモデルケースを更に現地に溶け込ませる仕組みを考えながら、各地で展開していくことこそが日本が世界で行う各事業の中で現地文化の交わり合いながら地域コミュニティを形成・エンパワメントしていくうえで重要なことではないかと強く感じた。

➤ 大学講演（サントドミンゴ自治大学）

アメリカ大陸最古の大学である同校の芸術学部の講堂にて講義を実施。盆踊りについての説明、炭坑節実演、世界Bon Bonの実演（時間の都合でMerengue Bon Bonのみ）、歌舞伎の隈取りの実演、希望学生（1名限定）への歌舞伎メイク、獅子踊りという流れで実施。開始時間が遅れたことから、時間の都合上準備してきたすべてを紹介できなかったわけではないが、大学講演、或いはエンターテインメントとしての講演にも適応できるコンテンツを整理できたと認識。

また学生たちからも多数の興味深い質問を受けここに紹介する。

Q.白塗りの材料を知りたいドミニカ共和国の白塗り文化はあるがこんなに早く塗れないのでびっくりしてる。

A.白塗りの白粉をプレゼント

Q.新しい文化をつくり出す上で多方面からバッシングはないのか

A.ある、が自分の信念が本気であれば切り抜ける

またそれは自分だけのものでなく周りを幸せにするものであればいつかは認められる

➤ 日系社会との交流

ドミニカ日系人協会（ASONAJA）嶽釜会長と2回面談を行ったほか、盆踊り大会に招待を受け、日本舞踊・剣舞、世界Bon Bonを披露した。盆踊り大会においては、1世から4世まで非常に多くの日系社会のメンバーと交流することができた点は貴重であった。ド

ミニカ共和国においても盆踊りが日系にとどまらず、ドミニカ共和国人も含む社会に根付いていると感じるとともに、今後の発展に対して大いに期待している。嶽釜会長との面談においてはドミニカ日系社会の歴史と現在を知ることができ、歴史を作ってきた張本人からの重みある言葉を深く胸に刻み、かつ、おこがましいながらも、自分のこれまでの人生と重なる部分を感じた。具体的には、自分の師匠である母が日本舞踊界で所属していた協会を離脱し独立したことで、自由を得たかわりに、協会からの締め出しを食らう中で、独自にネットワークを一から作り、ルートを開拓、創意工夫の連続でコンテンツを新たに作り上げ、芸の道を深めつつ、企業としての成長を進めてきたという経緯がある。これは同じ日本人なのに異国の地で奮闘し、工夫の中で人生を切り開き、日系社会を作り上げてきた嶽釜会長の人生に重なり、またおおいに共感をしたところである。嶽釜会長からは人生歌である「波濤万里～ドミニカに生きる～」を聞かせていただき、歌詞を読んだうえで、その場で振付の案を作り披露させていただいた。これに大変感動された様子を見て、更にこの日系社会のためにできることをしていきたい、という思いが強まった。

➤ 広報・報道

滞在期間中にTV局での取材と国立劇場での囲み取材を2局から受けた。また、様々なWEBニュース、SNSでも発信があった。このような機会を通じ、日本、およびJICAの広報に協力できたものと認識。

5. 展望と提言

➤ 世界Bon Bon

今回の滞在では、3つの新たなコンテンツの制作準備を整えるとともに、海外においても誰も取り残さないという盆踊りの精神の下、各作品がその場で踊れ、高い評価を得ることができる点を実感した。Artist in Projectの終了後の展開については、今後の関係者間の協議次第となる部分があるが、方向性としては世界Bon Bonのプラットフォームを運営する一般社団法人を立ち上げ、世界のより多くの方々が使えるコンテンツとして世界に拡げていくことが想定される。今年度末を目標にこの運営のための仕組みを整えつつ、将来的には全国100都市での世界Bon Bonの制作・開催を目標に、進めて社会への影響力の拡大を目指したいと考えている。現在新たに話が来ているところでは、ラオス、カンボジア、グアテマラ、キルギス等であり、また2025年10月11日に大阪万博会場にて開催される「いのち会議」のフィナーレを飾る「いのちBon Bon」イベントにも参加を予定しており、これも一つのマイルストーンとして位置付けている。

➤ 舞踊と開発

今回の滞在において、JICAとの様々な意見交換の中でこれまでの自身の活動の社会的な価値を再度掘り越すことができた。世界Bon Bonのように盆踊りを通じて、「誰も取り残さない」舞踊を通じて、コミュニティやチームのつながりを強化していく、コミュニティエンパワーメントの一つのツールとして、舞踊はこれからも大いに開発の中で役割を得ていくことであろう。また、自身の経験として、①震災復興の活動、②舞踊という社会活動を通じた学校運営改善の事例も汎用性のあるモデルとなることが期待される。①震災復興については、今回の能登震災においてまさに現在進行形で取り組んでいるが、震災後の疲弊した現地コミュニティとの間で準備から実施までの一連の活動を通じて、被災コミュニティに震災後の各種活動を進めていくうえでのコミュニケーションとチーム体制を生むことができ、これが核になって、震災復興及び新たな街づくりに取り組む新たなチームを作り出すことが期待される。つまり、ワンショットの人々が元気になるイベ

ント、にとどまらず、地元の仲間と中長期的にかかわることで、盆踊りを一つの活動の柱として、コミュニティエンパワーメントを図っていけるということである。②の学校運営改善については、過去かかわった一事例である。県内でも低迷していた高校において、同校の社会活動として、地域祭りでの舞踊イベントへの参加をするための講師として招聘された。学究活動への意欲が高くなかった生徒たちも、同舞踊イベントへの参加を一つの生活の中でのモチベーションとし、規律ある舞踊練習への参加を通じて、社会性を身に着けていった。これが数年間で伝統となり、学校運営、学習参加にも規律をもたらし、現在は県内でもトップレベルの高校にと、飛躍的にランクアップした。このように、学校の外での行事に出ていくことで、社会性の高まりと規律の強化を図ることができた事例である。すべてのケースに当てはまるわけではないものの、このような事例が学校運営改善の一つのヒントとなることを期待している。

➤ 舞踊と観光開発

舞踊と観光開発については日本にも様々な事例があり、自身がかかわっているアニソン盆踊りなどもその一例である。グアナニコ、コトウイに共通しているのは、音楽を観光資源とできるポテンシャルとプレーヤーがいるものの、十分に課金して後続に託していくためのシステムや資金ツールがまだまだ十分ではない、というところである。ただしグアナニコは楽器制作という手に職をもった音楽家がいるため、生計を確保する上ではアドバンテージがある。コトウイについては、歴史、文化などに魅力があり、また街としても観光客を呼び込むためのインフラを整えつつあり、今後観光客が増加していく可能性がある。係る状況で、まずはEl Jameoの毎週定期的に開催している練習に観光客を呼び込み、観光ツアー化していくことは試行の価値があるだろう。自身も世界の音楽、舞踊をこれまで見てきているが、コトウイのEl Jameoのような明るさとエネルギーを持ったグループと出会えることはなかなかなく、彼らの練習会場に入り、歌い、踊り、話をする、という経験はただただ楽しく、何事にも代えがたい。ここを課金するツールとして育てていくことができれば、後継者の育成も含め、持続可能な伝統音楽の継承につなげていけることができるのではないか。また、両地域のバンドについて、ライブ配信を地道にやっていくことで、将来課金できるツールになる可能性もある。勿論確約するのは難しいが、そのほかにも、新しいツールにしっかりとアンテナを張り、取り組みも進めていくことを検討いただきたい。また日本の公的、或いは民間の機関・組織においても、両国の文化を引き合わすチャンスを今回の私のドミニカ共和国の活動のようにどんどん作って頂ける機会が芽生えれば、現地の文化や課題などをより伝えることができ、また解決にむけて様々な賢者、文化人たちの興味深いアイデアや協力を得ることができると考えており、文化の財源を共に分かちあい、歌い踊り合うことで持続可能な開発を可能にするための新しいツールや道しるべを作っていけるものと確信している。

以上